

# 「カリキュラム・マネジメント真駒内Version」の構築を目指して

—「協働による授業設計」と校内授業研究会の取組に焦点をあてて—

小倉 靖範

北海道真駒内養護学校

KEY WORDS : カリキュラム・マネジメント 協働による授業設計 授業研究会

## 1 研究背景

### (1) 「カリキュラム・マネジメント真駒内Version」について

本校では、平成28年度より「社会とのつながりを大切にした教育課程を目指して～日々の授業と教育課程の改善をつなげるための仕組みをつくる～」を研究主題とし、3か年計画で「カリキュラム・マネジメント」の仕組みを構築するための実践研究に取り組んでいる。

本研究に取り組んだ経緯は、学習指導要領の改訂に加え、以下のような課題意識によるものであった。

①教育課程に関わって「学部間の教育課程の接続（連続性と独自性）」や「日々の授業と教育課程改善のつながりの希薄さ」等に課題が見られた。

②学校経営上の課題として「協働する組織の基盤つくる（チーム真駒内）」ことに取り組む必要性があった。

そこで、教育内容の質的な向上と校内における協働体制の構築に向けて、日々の授業づくりと教育課程改善のPDCAサイクルが循環するための仕組みを検討し、本校としての「カリキュラム・マネジメント」の基盤を確立することを目指した（図1参照）。その際、授業づくりと教育課程の改善が結び付くためには、個別の指導計画と年間指導計画が連動し、一つのシステムとして機能することが重要であると考えた。併せて、学校として教えるべき内容が記載される「年間指導計画」が、小学部から高等部までつながることで、教育課程が整備されることが考えた。

また、「カリキュラム・マネジメント」に全教職員が参画し、「授業や指導の根拠を説明できるようになる」ことを研究のゴールと位置付けた。



図1 「カリキュラム・マネジメント」の構造図

### (2) 昨年度の研究概要

本研究では、各年度の研究内容を次のように設定した。

1年次：「個別の指導計画」における目標設定の根拠の明確化

2年次：「育てたい力」の明示化と「年間指導計画」の見直し

3年次：新学習指導要領に基づく教育課程の編成

昨年度（1年次）は、国語・算数／数学を対象授業に、個別の指導計画の「目標設定のプロセス」に焦点を当て、研究を進めた。具体的には、実態把握から個別の指導計画の目標設定に至る過程に「課題関連図」を位置付けた。併せて、研究授業用指導案の様式を工夫し、個別の教育支援計画から個別の指導計画に至る各目標群を併記するようにした。併せて、個別の指導計画における国語・算数／数学の目標と関連する自立活動や合わせた指導の目標を指導案に記載し、目標群のつながりを「見える化」することを試みた。

昨年度の研究における成果と課題を踏まえ、「課題関連図」については改良を図りつつ、今年度（2年次）は、「年間指導計画」と「協働」に焦点を当て、授業設計について検討することとした。

## 2 研究目的（今年度）

目的①：授業設計の手続きを「課題関連図」・「年間指導計画」・「指導方法」に分解し、一つ一つを丁寧に掘り下げることにより、授業や指導の根拠を説明する上で要点を検討する。

目的②：「年間指導計画」を作成する上での必要な手続きについて、校内において共通理解を図る。

目的③：授業づくりを通して、教師間の協働性を高めるとともに、本校における「協働」を進める上での課題を明らかにする。

## 3 研究方法

### (1) 「協働による授業設計」について

「協働による授業設計」の大まかな流れを図2に示す。まず、担任だけではなく、学年教師、自立活動教諭などの専門職、コーディネーター、寄宿者指導員がもつ情報を一元化した上で、自立活動の6区分から実態把握を行い、「課題関連図」を作成する（注：「課題関連図」作成については、本研究集録の第4分科会

発表を参照のこと)。その後、授業設計の手続きを3つのチームに分割し、授業づくりを進める。

## (2) 「年間指導計画」の見直しについて

対象授業：生活単元学習（小学部）

作業学習（中学部・高等部）

平成21年～24年度の校内研究では、キャリア教育の推進に向け、本校として培うべき「生きる力」を五要素に整理した。今年度は、これらの知見を授業づくりに反映させるために、図3に示すように「生きる力の五要素」を観点に「育てたい力」を明確化し、ねらいを焦点化する手続きを取り入れた。また、各「単元」や「単元の構成」に着目し、1年間を見通して、どのように単元を配列すべきか、といったことを検討する。

## (3) 「校内授業研究会」の取組

平成29年度は、授業を公開する学部以外の学部を臨時休業日として「校内授業研究会」を企画した。この授業研究会の目的は、本時の授業に至る授業設計のプロセスを知り、授業に関わる全校職員で協議・共有することである。そのため、研究協議のグループ編成においても、経験年数に応じて「若手」・「中堅」・「ベテラン」で編成したり、各学部教諭・専門職・寄宿者指導員を混合させて編成したりすることで、学部間の違いや互いの専門性の違いを生かしつつ協議できるよう工夫した。

## 4 結果 ～「校内授業研究会」の取組から～

【第1回】高等部（7月実施）

協議題：授業設計の手続きや視点として、「これが大事」・「こんなことが必要だ」と思ったこと。

授業研究会では、公開授業について、「課題関連図」、「年間指導計画」、「指導方法」の各チームが、それぞれコンセプトや授業づくりの過程を報告した。協議を通して、三者を関連付けて説明することの必要性や経験年数の違いによって授業の見方が異なることが示唆された。【第2回】小学部（9月実施）

協議題：①その単元を通して、学年・学部で「経験させたいこと」や「育てたい力」は何か。

②上記と同単元で、抽出児童の課題に応じて、どのような指導内容が設定されるべきか。

年間指導計画の中の1つの「単元」に焦点を当て、協議を進めた。具体的には、小学部から高等部まで共

通して設定されている「買物学習」、「校外学習」、「お楽しみ会（自治的活動）」、「お手伝い（作業学習）」を取り上げ、①「学校として教えるべき教育内容」と②「個の指導内容」のそれぞれの視点から、各単元の系統性や発展性を検討した。「小・中・高という教育課程の連続性」と「個（児童生徒）としての学びの連続性」のバランスが「年間指導計画」を考える際の要点になることを全校で共通理解した。

【第3回】中学部（12月実施）

協議題：真駒内養護学校として、中学部や高等部の作業学習を通して「育てたい力」は何か。

これまでの授業研究会の成果と課題を踏まえ、「根拠を語る」ためには、「課題関連図」、「年間指導計画」、「指導方法」のつながりを説明できることが重要であることを確認した。また、「年間指導計画」の作成手順では、本校「生きる力の五要素」から「育てたい力」を明確化する手続き（図3参照）がねらいを焦点化するために不可欠であった。また、学習グループに属する生徒の特徴を踏まえ、「本グループの作業学習は、～をねらった授業です」ということが、教師間で共有されていることで、ティーム・ティーチングが円滑に進むことを確認した。その上で、1年間という期間で、そのねらいを達成するために、「単元の構成」を工夫すること（スパイラルに高まり・広がるような構成）の重要性を確認した。

## 5 まとめ

授業研究会を重ねる中で、個別の指導計画による「個の課題を焦点化する視点」と年間指導計画から「学校として教えるべき教育内容を考える視点」を相互に関連させて計画することが、必ずしも十分にできていなかったことが、校内で共通認識された。これを受け、年間指導計画と個別の指導計画を行きつ戻りつし、すり合わせる手続きが、「カリキュラム・マネジメント」の鍵となることを確認できた。併せて、「協働」の必要性やその課題を教職員が再認識する契機とすることができた。

